

ハイデルベルク信仰問答講解説教5「真の仲保者」(2011年9月4日 礼拝説教)

【聖書箇所】

災いのふりかかる日／わたしを追う者の悪意に囲まれるときにも／どうして恐れることがあろうか。財宝を頼みとし、富の力を誇る者を。神に対して、人は兄弟をも贖いえない。神に身代金を払うことはできない。魂を贖う値は高く／とこしえに、払い終えることはない。人は永遠に生きようか。墓穴を見ずにすむであろうか。人が見ることは／知恵ある者も死に／無知な者、愚かな者と共に滅び／財宝を他人に遺さねばならないということ。自分の名を付けた地所を持っていても／その土の底だけが彼らのとこしえの家／代々に、彼らが住まう所。(詩編49:6-12)

このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。律法は弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後になされた誓いの御言葉は、永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです。(ヘブライ7:26-28)

【説教】

ハイデルベルク信仰問答の第五主日、問12-15までを今日は読んでまいります。ここから信仰問答は新しい部分に入ります。第一部の人間の悲しさ、人間の罪の問題は終わり、今日から第二部、人間の救いについての部分に入ります。ここがこの信仰問答の本論、中心となる部分と申し上げてよいでしょう。

読み進めていきますとすぐお気づきになるかと思いますが、ここではまず使徒信条が出てきます。わたしたちが毎週礼拝の中で告白する全教会共通の信仰告白です。そこにわたしたち信仰者が信じるべき福音が要約されていると、この信仰問答は述べています。言わばここに聖書の示す神さまの救いが的確に言い表されているということです。信仰問答はその使徒信条の言葉一つ一つをひも解いていきます。

そしてその後、今度は聖礼典のことが続きます。プロテスタント教会において聖礼典とは洗礼と聖餐です。この二つの礼典についての問答が置かれています。そして最後に「鍵の務め」という部分がありますが、ここで扱われているのは、説教と戒規です。戒規というのは、もし信仰者に信仰から外れた言動が繰り返されるならば、それを戒め、陪餐を停止したり、場合によっては除名することです。それによって悔い改めが促され、また教会に回復する。そういう手続きです。説教もここでは福音の告知と共に悔い改めを促すものとして取り上げられます。こういうこともこの人間の救いという部分に含まれてまいります。

ここには一人の人間が救われていくプロセスと言いますか、救いに至る手続きがあると理解してよいでしょう。つまりわたしたちの救いは、ある日突然起こることではなく、まず教会が信じ、告白し続けてきた信仰を、わたしの信仰として信じ受け入れること。その印として洗礼を受け、キリストの体に結ばれること。また聖餐に与り、説教を通して、そのキリストの命を絶えず確かめ、その喜びを新たにしていくこと。更にはたとえ信仰から離れてしまっても、説教や戒規によって、悔い改めが促されることによって、再び救いに与ることができるといった約束までなされるのです。わたしたちの救いにはこういう手続きがあるのです。

この説教を開始した時に、教会的信仰を身に着けていただきたいと申しました。わたしたちの救いは自分で勝手に考えていることではありません。そこではきちんと教会的な手続きが取られているのです。そんなややこしいことは抜きにしてと言われるかもしれませんが、しかし救いというのはそれこそわたしたちの命の問題なのです。命に関わることです。それがいい加減になされていいはずがありません。それは自分だけが

解していることではなく、極めて客観的な公の出来事なのです。信仰を何か個人的なものとして捉えている人がいます。自分だけの心の問題だ。そんなに単純なものではない。皆さんの救いの手続きは、皆さんが勝手にいじったり、やめたと言ったりできない。初めからもうその手を離れている。それは神さまが定めたものであり、教会という公の場所がその救いを担っています。決して自分の中だけで完結していくものではありません。

先週は、転入会がありました。お二人の方が他の教団から転入会された。先方の教会からは大変丁寧な推薦状が届きました。もちろん教会の役員会で審議し可決されて推薦書が届くのです。それを受けて、教会では転入会に向けて準備をいたします。長老会で試問をし、入会を可決されて、その後礼拝の中で入会式をいたします。そして入会後に、確かに入会したことを書面にしたためまた先方の教会に送ります。ただ自分が気に入ったから教会を変わるという話ではない。そんな個人的な話ではない。そこでは常に教会的な手続きがなされるのです。特に長老制度を持つわたしたちの教会はそのことを徹底します。牧師個人で、教会員一人でいろいろ決めて行うのではなく、長老会で審議し決めていきます。皆さんには信仰とはそういうものであることを理解していただきたい。

さて、わたしたちの救いについても、それは自分勝手に考えていることではなく、教会が信じている救いの筋道があります。それを信仰問答は丁寧に順序立てて記していきます。問12-15までのところを続けて読んでいただきますと、問答がつながっていること、きちんと論理立てて展開されていることがお分かりになるかと思いますが、少し簡単に追ってみたいと思います。

前回の人間の悲しさの最後の部分では、問11で「神の義は、神の至高の尊厳に対して犯される罪が、同じく最高の、すなわち永遠の刑罰をもって、体と魂において罰せられることを要求する」とありました。人間は罪を犯して神さまの至高の尊厳を傷つけてしまいました。神のかたちであることを自ら捨てたのです。そのようにして神さまのかたちを汚し壊してしまった。それが赦されるはずがありません。それは最高の永遠の刑罰をもって罰せられなければならない。うやむやにはできないのです。そうでなければ神さまの義は嘘になってしまいます。

ではどうしたらよいのか。神さまの義が貫かれ、かつわたしたちがその罰を逃れられる方法があるのか。それは問12が答えているように、「自分自身によってか他のものによって、完全な償いをしななければならない」であります。誰かがこの罪を完全に償うことによって、初めてその要求は満たされるのです。では誰が償うのか。自分自身か。問13、自分で自分の罪を償

うことはできない。それは確かにそうです。溺れている人が自分で自分を助けることはできない。溺れていない人に助けてもらわなければならない。しかしこのことにわたしたちは案外無頓着なのです。自分で自分が救えるところまで考えている。

わたしたちの教会にお招きしたこともある加藤常昭先生が、このハイデルベルク信仰問答の講話を出しています。関心のある方はお求めになることを勧めますが、その本の中で、加藤先生は当たり前なことだけと前置きをされつつも救いは神さまに救っていただくことだと述べています。確かに当たり前のことですが、それがどうかすると間違ってしまう。自分で自分を救う生き方をしてしまう。例えばそれは主イエスが対立しました律法学者やファリサイ派と呼ばれる人々の生き方でありました。彼らは神さまを信じている人たちです。でも実際は自分の行為、律法の実践をすることで救いを獲得しようとしていた。そこには神さまがいないのです。ただ如何に律法を守ることができるか。神さまよりも律法どおりに生きる自分が問題なのです。そしてその場合の信仰は自分の行為を見せびらかすものになってしまいました。神さまの栄光のためではなく、自分の栄誉のために信仰に生きるような生き方になってしまいます。わたしたちもそういう誘惑に陥りやすいのです。神さまを信じていると言いながら、神さまに心が向かっていない。神さまが何をしてくださったかではなく、自分が何をしたか、自分が何ができるか。そういうことばかり考えて生きようになる。どうしてそういう逆さまな生き方になってしまうのでしょうか。

それは無意識の内にも、自分で自分を救えるかのように考えてしまうからでしょう。それは同時に自分の罪の重さにまだ気付いていないということも言えるのです。そのことを問13-14にかけて信仰問答は答えています。この罪の問題を自分で償うことはおろか、日毎にその罪の負債は大きくなるばかりである。それは問8でも明らかなように、わたしたちは「どのような善に対しても全く無能であらゆる悪に傾いている」のです。そこでは日々罪を重ねるばかりなのですから、神さまに対する負債はどんどん増えていきます。

またこの人間の負債を他の被造物が償うこともできない。ここでは例えばユダヤ教において動物を犠牲にして罪を償うことをイメージしてもよいでしょう。人間以外の何かがこの罪を償うことができるのか。やはり人間の罪の責任は人間が負わなければならない。動物の犠牲はそれを完全に償うことはできません。ですから旧約の民はその犠牲を毎日ささげ続けなければならないのでした。おびたしい数のいけにえが毎日神殿の祭壇にささげられなければならないのです。それは完全ではない。

また人間もそうです。誰かが誰かの罪を償うことはできない。この信仰問答が書かれた背景には宗教改革がありますから、当時のローマカトリック教会との対立を考えることができます。カトリックでは聖人信仰があります。聖人と呼ばれる人の功德に与って罪が免除される。そのために有名な贖罪状、免罪符が売られたのです。しかし人間が人間を償えるのか。そこで信仰の筋を通そうとしたのがプロテスタント教会です。人間はどんなに信仰深い人でも神さまの前には罪に汚れている。日毎にその負債を増している。それは「同じ穴のむじな」なのです。傷をなめ合うことはできても、その人を救うことはできない。

動物も人間も単なる被造物ではこの問14の答えにあるように「罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐え、かつ他のものをそこから救うことなどできない」のです。それがこの信仰問答の立つ基本的な立場なのです。これが最初のボタンであり、ここが間違ってしまうと、わたしたちの信仰もどこかおかしくなる。神さまがいなくても、自分で自分を救えるかのように考えてしまうのです。

それなら、この罪がどのように解決されるのでしょうか。神さまの義が貫かれるような償いは一体誰がするのでしょう。そこで問15です。ここに「仲保者」とあります。これは「仲介者、なかだち」ということです。つまり神さまと人間との間に立つてなかだちをしてくださる存在が必要ということなのです。

わたしたちの人間関係でも、トラブルが起こって、自分たちでは解決することができない問題になってしまう。でもそこに調停役、第三者が入ることで話し合いができるということがあります。ただ罪の問題の場合、人間が一方向的に悪いのであって、両者が話し合って折り合いをつけるような問題ではありません。ですから、この信仰問答では、「仲保者また救い主」とあります。そのなかだちは両者の言い分をそれぞれ聞くというよりは、救い主として、完全に罪に墮ちてしまっただけで自分ではどうすることもできない人間をそこから救済し、神さまにとりなし、和解を取り付ける役割を果す者のことなのであります。そのためには、この答えにあるように「まことの正しい人間であると同時に、まことの神でもあられるお方」そういう存在が必要なのです。つまりまことの人間として人間の罪の責任を担うことができる方、でも同時にまことの神として、この罪の重荷に耐え、かつそこから救い出すことができになる方ということなのです。そんなに都合のいい存在があるのか。

その答えは次に読みますところ第六主日のところで問18に表されています。それがイエス・キリストに他なりません。このキリストこそまことの仲保者として救い主としてわたしたちに与えられたただ一人のお方なのです。今日与えられたヘブライ人の手紙を読みます。「大祭司」というのは、旧約聖書においてやはり神さまとイスラエルの民を仲介する役割を担ったものであります。イエス・キリストこそが完全な大祭司であり、わたしたちにとって最も必要なお方なのです。神さまはこの真の仲保者を与えて、わたしたちに和解の道を開いてくださいました。わたしたちの救いは、神さまがすべて整えてここに用意されています。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを知らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハネ14:6)ここに全く望みを絶たれた人間のそれでも救われるただ一つの道があります。お祈りをいたします。